

“変革”への一歩とは

石山 恒貴

コロナ禍、自然災害、戦争など、思いもよらなかった出来事が生じ、影響の大きさに圧倒されている方も多いのではないのでしょうか。そうした圧倒的な出来事に遭遇したとき、我々は個人の無力さに打ちのめされてしまうかもしれません。

また人には変化を恐れ、安定を求める傾向もあるでしょう。一大ブームとなったアニメ『鬼滅の刃』の登場人物に、冷酷な鬼のボスである鬼舞辻無惨^{きぶつじむざん}がいます。鬼舞辻は変化が嫌いだと述べます。永遠に変わらない完璧な状態を目指す鬼舞辻にとって、変化とは劣化、衰えであり、それゆえ変化を嫌うのです。『鬼滅の刃』の鬼は、凶暴で大きな力をふるい、一見すると強い存在に見えます。しかし、筆者には、鬼は人の弱さとはかなさの象徴のように見えます。人は弱く、はかない存在だからこそ、鬼舞辻のように求めても得ることができない永遠に変わらない安定を求め、変化から目を背けてしまうのでしょうか。では、圧倒的な出来事に対し、個人が変革を試みることに意味はないのでしょうか。また、はかなく弱い存在である人は、変化にあらがうことはできないのでしょうか。筆者はむしろ、人は、はかなく弱い存在だからこそ、変革を目指すことに意義があると考えています。

筆者が研究の対象としている「越境学習」において、学びとは個人だけのものでも、集団だけのものでもありません。集団の中のさまざまな振る舞いこそが個人の学びであり、個人と集団に共有されるものなのです。つまり、集団を少しでもより良くしようという「小さな変革」が学びそのものであり、それは成長と言い換えることもできます。「越境学習」とは、同質な場から越境し、新鮮で多様な価値観や知識を個人と集団に取り入れることを意味します。多様な価値観や知識の個人と集団への取り入れは、小さな積み重ねですが、それこそが変革であり、個人の成長です。個人は弱くはかない存在だからこそ、集団を少しでもより良くし、生涯学び成長し喜びを感じる。そう考えることが、変革への第一歩ではないのでしょうか。



PROFILE

いしやまのぶたか：法政大学大学院政策創造研究科教授。博士（政策学）。NEC、GE、米系ライフサイエンス会社を経て現職。越境的学習、キャリア形成、人的資源管理等が研究領域。日本労務学会副会長、人材育成学会常任理事。著書に『地域とゆるくつながるユーザープレイスと関係人口の時代』（静岡新聞社、2019）、『日本企業のタレントマネジメント』（中央経済社、2020）、『越境学習入門』（日本能率協会マネジメントセンター、2022）等。